

# 永瀬義郎先生のこと

赤間峰子

本誌第七十五巻、第七十六巻の表紙を、夢にあふれた版画で飾って下さった永瀬義郎先生は、三月八日に八十七歳でなくなりになりました。そのことを報じた新聞には、「告別式は行なわず、四月二十八日から開かれる予定だった個展の初日に「永瀬義郎を偲ぶ会」を催します」とあって、それがいかにも先生らしく、今さらのように生前の先生をおなつかしく思いました。といっても私が先生を知ったのは一昨々年、小田急百貨店で開かれた「永瀬義郎のすべて展」が初めてでした。直接お目にかかったのもその時と、あと一回お宅におじゃました時だけなのです。それでも、先生と奥様とお二人のお心づくしでしょうか、展覧会のお誘いはもちろん、季節ごとにも美しい版画の絵葉書に一筆そえられたものをいただきました。そして先生は、最初の時は赤と白の大柄の模様のアロハシャツ、次には真赤なセーターをお召しになつて、それがまた、とてもよくお似合ひでした。

そもそも私は、初めて先生の画を拝見した時からすっかりとりこになつてしまったのです。そしてこんなにかわいらしく美しい画をおかきになる方は、きっと子どもの心をいつまでももっていらっしやる方に違いないと思ひ、どうしても表紙にいただきたいと思ひつめました。「有名な方だからとて……」としり込みしていらした河合編集長に無理にお願いして、ともかくお宅へ行っていただきました。ところが実にあっさりと受けて下さったとうかがい、私はまたまた先生のファンになつてしまったというわけです。

この、先生を偲ぶ会に出席して、やはり私と同じような(多分)女性、が実に多いのにびっくりしました。「会費は男性五千元、女性三千元、お子さまはご自由にお連れ下さい。当日は平服でお越し下さい。ご出席の方には記念として作品一点をさし上げます」と至れりつくせりのご案内をいただいで、追悼会にはちょっとふさわしからぬ、うきうきした気分

で出かけました。少々定刻におくれたせい、会場は人いきれと煙草の煙でいっぱい、御馳走などはほとんどのお皿が空っぽという陽気な会でした。発起人の松永伍一さんのごあいさつにつづいて水上勉さん、大竹しのぶさん、そのほか先生にゆかりの方たちが写真の先生にむかって話されました。いつまでも若さをたもっていらした先生の秘けつは、「過去をふり返らずに、今日から明日のことを考えること」とおっしゃったとの水上さんのお話は印象的でした。宮城まり子さんは「私は今、先生が面倒を見て下さったねむの木の子どもたちの画の展覧会で札幌にきています。だから行かれないのです。でも先生はきつと、いらした方たちに「よく来たね」とにこにこしておっしゃるでしょう」とメッセージを寄せられました。そして大竹しのぶさんはテレビで見る清純な感じそのままに、一生けん命先生によびかけられました。「去年同じ病氣(直腸がん)で父をなくした私は……」と声をつまらせて奥様をねぎらわれ、場内もしんとなりました。でもそのあと先生のお好きだった歌、星は何でも知っている、雪の降るまちを、この道、四季の歌を全員で合唱してまた会はもり上りました。河合編集長のすばらしいテノールに押され気味

ながら、私も久々に声をはり上げて歌いました。

このあと思いがけず松永伍一さんにもごあいさつができて、以前ご執筆をいただいたお礼を申し上げることもできました。何か永瀬先生のおひきあわせのような気がしますが、今夜の出席者は当初二五〇名の予定が六百名になって大分発起人の方々はご心配だったともうかがいました。

一同帰りぎわに先生の作品を一点ずついただいて奥さまと一粒種の薫さんにごあいさつをして失礼しました。薫さんは今年日大芸術学部を卒業されましたが、もう昨年先生とお二人で「親子展」をなさるなど、立派にあとをついでいらっしやいます。

画にそえられた先生のお言葉はそのまま、先生ご自身を現わしているといえましょう。

清貧に甘んじなければ

いい作品は生れない

と言っても貧乏すると

卑屈になり、作品まで濁って来る。

ノーブルな精神こそ

優れた作品の母体となる。

永瀬 義郎